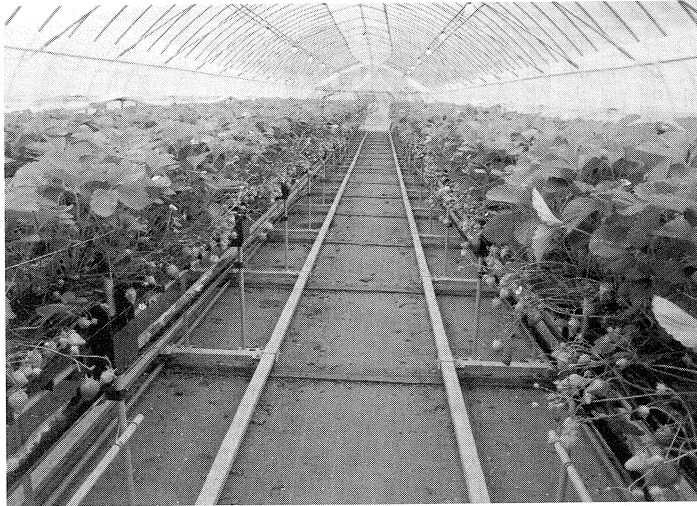


イチゴの高設栽培システムで

サンポリが県知事賞

作業効率上がり、収量も増加

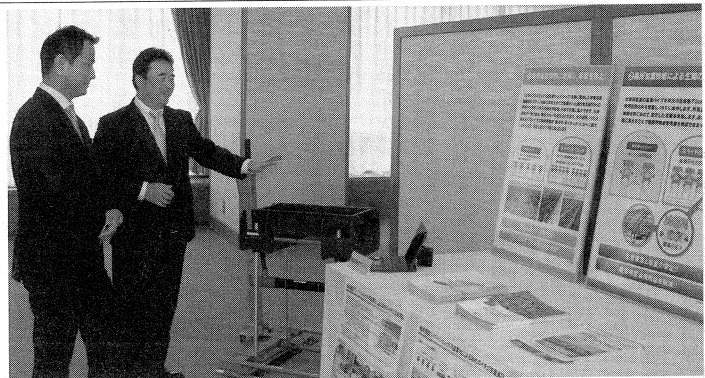
再生プラスチック製品の高設栽培システム「ら製造業のサンポリ（新築くラック）」が、県主催の地町）が開発したイチゴ 第7回県産業技術振興奨



サンポリのシステムを導入した山口市のイチゴ農家

励賞で最高位の県知事賞を受賞した。

このシステムは、露地栽培だと腰に負担がかかる作業を楽にしようと、県内の農家から依頼を受け、約20年前に開発を開始。高さ90センチ程度の位置にプラスチック製のラックを置いて、立ちながらイチゴ栽培の作業ができるようにする資材を1998年に商品化。これに改良を加え、固定式の資材を移動できるようにしてビニールハウス内の通路を1カ所に集約することでハウス内の面積利用率を42%から75%に拡大。さらに昨年、ラック内に温水を通すパイプを設けて、イチゴの栽培に



村岡知事（左）にシステムの説明をする鹿嶋社長

適した土の温度を効率的に維持管理できるようにした。

これらによって、イチゴを植える本数を固定式と比べて1・8倍に増やすとともに、収穫期を10月から7月までの10カ月（従来は5カ月）とし、ほぼ1年を通して出荷できるようになった。さらに、ハウスの効率化に

よって暖房費を30%抑えることも可能だとい

う。1千平方メートルあたり400万円ほど導入でき、耐用年数は30年程度。県内では山口市の観光農園をはじめ、東日本大震災による津波で被災した宮城県亘理

町のイチゴ農家の再建に当たっても、この資材が使用されているという。

鹿嶋英一郎社長は「10坪当たり10ト以上の収穫が可能で、国内でもトップクラスの生産効率を誇る。さらに収量を増やすための改良を重ね、新規参入者や高齢者が働きやすい環境と収益が上がる仕組みを作って、日本の甘くておいしいイチゴを

世界にも広めたい」と話している。

3月25日に県庁で表彰式があり、鹿嶋社長と、移動式システムを開発する際に構造計算などで協力した宇部高専の杉本信行名誉教授が、村岡副知事から賞状を受け取った。周防大島町のジャ

製造会社で同社の移動式資材を見たことがあるという村岡知事は「案に作業ができるという印象だった。地域経済の活性化や雇用の創出に向け、さらなる技術強化に期待する」と激励した。

（吉野敦裕）